

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書文学特殊研究 a	小友 聡	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 故大住雄一先生の旧約学諸論文、とりわけ 2010 年以降のものを読み、先生の神学的遺産をきちんと学ぶ。		
<到達目標> 大住雄一先生が旧約学者として何を考え、何を目指したかを知り、大住旧約学の全容を理解する。		
<授業の概要> 毎回、大住雄一先生の旧約論文の一つをじっくり読み、全員で議論する。		
<履修条件> 大住先生の旧約学を学び、また、それをきちんと理解できる人。		
<授業計画> 第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 『神のみ前に立って 十戒の心』（教文館）2016 年、第 1～7 回 第 3 回 〃、第 8～13 回 第 4 回 〃、第 14～20 回 第 5 回 〃、第 21～27 回 第 6 回 『聖書』（わたしたちと宗教改革第 2 巻）（教団出版局）2017 年、第 1～2 章 第 7 回 〃、第 3～4 章 第 8 回 〃、第 5 章～ 第 9 回 「ノアの子らの系図―聖書の中の世界」（『神学』64、2002 年） 第 10 回 「律法からキリストへ」（『神学』70、2008 年） 第 11 回 「聖書学は礼拝学である―「伝道と現代神学の課題」をめぐる聖書学的考察」（『神学』71、2009 年） 第 12 回 「救済と創造」（『神学』73、2011 年） 第 13 回 「説教のことばと法のことば―申命記の構造とすることばの性質」（『神学』75、2014 年） 第 14 回 「種入れぬパンの祭り―農耕の祭りの歴史化という構想について」（『聖書学論集』46、2014 年） 第 15 回 まとめ		
<準備学習等の指示> あらかじめ大住先生の論文を読み、聖書学的に評価する。		
<テキスト> 大住雄一先生の著作『神のみ前に立って 十戒の心』（教文館）、『聖書』（わたしたちと宗教改革第 2 巻、教団出版局）、さらに大住先生が発表された学術的諸論文。		
<参考書・参考資料等> その都度指示するが、授業で取り上げなかった諸論文も読むこと。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度と学期末のレポート（8,000 字）で評価する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書文学特殊研究 b	小友 聡	＜担当形態＞ 単独
後期・2単位	＜登録条件＞	
＜授業のテーマ＞ 死海文書の「共同体の規則」と「ダマスコ文書」を、ヘブライ語の原典を参照しながら、読む。		
＜到達目標＞ 死海文書の神学と思想を理解し、全体像を展望できるようにする。		
＜授業の概要＞ 死海文書翻訳委員会訳『死海文書Ⅰ』を用いて、「共同体の規則」と「ダマスコ文書」を講読する。		
＜履修条件＞ 死海文書に関心があり、神学的に思考できる人。		
＜授業計画＞ 第1回 オリエンテーション 第2回 死海文書とは 第3回 「共同体の規則」「ダマスコ文書」概説 第4回 1Q 共同体の規則（テキスト1～9頁） 第5回 1Q 共同体の規則（テキスト～20頁） 第6回 1Q 共同体の規則（テキスト～30頁） 第7回 4Q 共同体の規則（テキスト～45頁） 第8回 4Q 共同体の規則（テキスト～60頁） 第9回 4Q 共同体の規則（テキスト～74頁） 第10回 ダマスコ文書（テキスト～88頁） 第11回 ダマスコ文書（テキスト～100頁） 第12回 ダマスコ文書（テキスト～112頁） 第13回 4Q ダマスコ文書（テキスト～122頁） 第14回 4Q ダマスコ文書（テキスト～130頁） 第15回 4Q ダマスコ文書		
＜準備学習等の指示＞ あらかじめテキストの原典と翻訳を読み、その思想内容をよく考える。		
＜テキスト＞ 死海文書翻訳委員会訳『死海文書Ⅰ 共同体の規則・終末規定』、ぷねうま舎、6,200 円を購入すること。原典はこちらで用意する。		
＜参考書・参考資料等＞ その都度指示するが、ゲザ・ヴェルメシ（守屋訳）『解き明かされた死海文書』（青土社）、コリンズ（山吉訳）『「死海文書」物語』（教文館）を読んでおくこと。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 授業での発表のほか、学期末に死海文書に関するレポート（8,000 字）提出で評価する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典特殊研究 a	本間 敏雄	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 創世記19章ロト・ソドム物語と、20章アブラハム・アビメレク物語をヒブル語原典（マソラ本文）において釈義しつつ、写本とマソラの専門的知識を修得し、ユダヤ教正典（Miqrā）としてのマソラ本文理解と諸現象の理解を深め、テキストの神学と本文形成の歴史を探る。		
<到達目標> レニングラード写本（Codex Leningradensis：L）を読み、写本本文の基礎的特質をマソラと共に理解できる。現代の代表的印刷聖書BHS及びBHQ本文とマソラ情報の特質を理解し、それぞれの脚注の内容判断と背景洞察、本文学的评价によりテキストに即した釈義ができる。その土台として、写本によりマソラ学者の仕事と本文の諸現象を認識し、その釈義的意義とテキストの神学、背後のユダヤ教神学について洞察できる。		
<授業の概要> 創世記19章ロト・ソドム物語と、20章アブラハム・アビメレク物語をヘブライ語原典（レニングラード写本 L）において読み、写本本文の特質と個々のマソラの意味を釈義的に学ぶ。また写本の歴史と全体像を学び、マソラ本文の諸現象を分析。当該諸テキストの「生活の座」（Sitz im Leben）と「テキストの神学」理解を試みつつテキストに表出しているユダヤ教神学（マソラ本文神学）について考察する。ロト・ソドム物語はイスラエルの歴史と思想に大きな影響を与え、神の民の選びと神の義に関わり、アビメレク物語は父祖アブラハム像に関わる特異なテキストであり、討議を通して思索を深めたい。「旧約聖書原典釈義Ⅰa」と合同。		
<履修条件> ヘブライ語文法修得者（中級以上が望ましい）。 「旧約聖書原典釈義Ⅰa」と合同なので、釈義を深め討議をリードすると共に、課題を見出し研究し、まとめる姿勢が求められる。		
<授業計画> 第1回 19：1－3 リエンテーション、ソドム物語、2人の御使い 第2回 19：4－9 ソドムの男たち 第3回 19：10－14 二人の客とロト家族 第4回 19：15－17 逃亡命令 第5回 19：18－22 ツォアル 第6回 19：23－29 ソドムとゴモラの滅亡 第7回 19：30－38 ロトの娘たち、モアブとアンモン 第8回 Lのマソラ（Mm,Mp,Mf.）の主要内容と原典釈義的意義 第9回 20：1－3 アブラハムとアビメレク、託宣 第10回 20：4－7 弁明と応答 第11回 20：8－10 アビメレクの譴責 第12回 20：11－13 アブラハムの弁解 第13回 20：14－16 アビメレクの対応 第14回 20：17－18 結末 第15回 総括（聖書学的、神学的）		
<準備学習等の指示> 当該本文を BHS で読み、構文と小マソラ（Mp）を調査し、その内容を考察。なお当該本文に関する問題、事柄で「ヒブル語入門」12補説や「旧約聖書の本文研究」（下記）を読んでおくと、諸現象を写本と本文形成の歴史において理解し、マソラ本文のユダヤ教神学的背景を考察する視座が養われる。		
<テキスト> レニングラード写本（Codex Leningradensis）写真版、Biblia Hebraica Stuttgartensia（BHS）：Genesiss, Biblia Hebraica Quinta（BHQ）：Genesis、「ヒブル語入門」（改訂増補版 左近/本間）（10文の構造（構文論）、12補説：本文の諸現象（補注一覧））。		
<参考書・参考資料等> 「ヘブライ語聖書への手引き」（R.ウォンネベルガー 松田伊作訳）、A simplified guide to BHS（H.P.Rueger）.「旧約聖書の本文研究」（E.ヴェルトヴァイン 鍋谷／本間共訳）。G.E.Weil, Massorah Gedolah-iuxta Codicem Leningradensem B19a, 1971, C.D.Ginsburg, Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible, 1897/1966. A.Geiger, Urschrift und Uebersetzungen der Bibel in ihrer Abhaengigkeit von der innern Entwicklung des Judentums,1857, 2Auf.1928. P.Kahle, The Cairo Geniza, 2ed.,1959. なおヒブル語本文と諸翻訳の関連の実例については「翻訳と本文」（1）～（34）（『形成』273～315号所収。1993.9/10－1997.3）。他諸文献、資料は順次提示。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 課題発表、討議、レポート（本文 6000 字以上）の総合で評価する（特にテキストとの対話の深度と理解、テキスト諸現象の認識と分析、及び考察と検証力）。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典特殊研究 b	本間 敏雄	＜担当形態＞ 単独
後期・2単位	＜登録条件＞	
＜授業のテーマ＞ 創世記21章イサク誕生物語と、22章イサク奉獻物語をヒブル語原典（マソラ本文）において釈義しつつ、写本とマソラの専門的知識を修得し、ユダヤ教正典（Miqrā）としてのマソラ本文理解と諸現象の理解を深め、テキストの神学と本文形成の歴史を探る。		
＜到達目標＞ レニングラード写本（Codex Leningradensis）を読み、写本本文の基礎的特質をマソラと共に理解できる。現代の代表的印刷聖書BHS及びBHQ本文とマソラ情報の特質を理解し、それぞれの脚注の内容判断と背景洞察、本文学的評価によりテキストに即した釈義ができる。その土台として、写本によりマソラ学者の仕事と本文の諸現象を認識し、その釈義的意義とテキストの神学、背後のユダヤ教神学について洞察できる。		
＜授業の概要＞ 創世記21章イサク誕生物語と、22章イサク奉獻物語をヘブライ語原典（レニングラード写本L）において読み、写本本文の特質と個々のマソラの意味を釈義的に学ぶ。また写本の歴史と全体像を学び、マソラ本文の諸現象を分析。当該諸テキストの「生活の座」（Sitz im Leben）と「テキストの神学」理解を試みつつテキストに表出しているユダヤ教神学（マソラ本文神学）について考察する。 イサク誕生物語と、とりわけ主の山伝承・アブラハムによるイサク奉獻物語はイスラエル思想史とユダヤ教神学に大きな影響を与えたが、解釈上困難な問題を提起しており、キリスト教的解釈（interpretatio christiana）と相まって考察を要求する。討議を通して思索を深めたい。「旧約聖書原典釈義I b」と合同。		
＜履修条件＞ ヘブライ語文法修得者（中級以上が望ましい）。 「旧約聖書原典釈義I b」と合同なので、釈義を深め討議をリードすると共に、課題を見出し研究し、まとめる姿勢が求められる。		
＜授業計画＞ 第1回 オリエンテーション、21：1－3 サラの出産 第2回 21：4－7 イサク命名 第3回 21：8－13 問題生起、父の苦悩と託宣 第4回 21：14－18 荒野の母子と託宣 第5回 21：19－21 井戸と子供 第6回 21：22－26 アビメレクとアブラハム 第7回 21：27－34 契約：ベエル・シェバ 第8回 22：1－3 試み：命令と応答 第9回 22：4－6 三日目に 第10回 22：7－8 父子の会話 第11回 22：9－12 父の行為、天の介入 第12回 22：13－14 雄羊、アドナイ・イルエ 第13回 22：15－19 託宣 第14回 22：20－24 ナホルの子孫 第15回 総括、問題、神学		
＜準備学習等の指示＞ 当該本文を BHS で読み、構文と小マソラ（Mp）を調査し、その内容を考察。なお当該本文に関する問題、事柄で「ヒブル語入門」12補説や「旧約聖書の本文研究」（下記）を読んでおくと、諸現象を写本と本文形成の歴史において理解し、マソラ本文のユダヤ教神学的背景を考察する視座が養われる。		
＜テキスト＞ レニングラード写本（Codex Leningradensis）写真版、Biblia Hebraica Stuttgartensia（BHS）：Genesisis、Biblia Hebraica Quinta（BHQ）：Genesis、「ヒブル語入門」（改訂増補版 左近/本間）（10文の構造（構文論）、12補説：本文の諸現象（補注一覧））。		
＜参考書・参考資料等＞ 「ヘブライ語聖書への手引き」（R.ウオンネベルガー 松田伊作訳）、A simplified guide to BHS（H.P.Rueger）。「旧約聖書の本文研究」（E.ヴェルトヴァイン 鍋谷／本間共訳）。G.E.Weil, Massorah Gedolah-iuxta Codicem Leningradensem B19a, 1971, C.D.Ginsburg, Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible, 1897/1966. A.Geiger, Urschrift und Uebersetzungen der Bibel in ihrer Abhaengigkeit von der innern Entwicklung des Judentums,1857, 2Auf.1928. P.Kahle, The Cairo Geniza, 2ed.,1959. なおヒブル語本文と諸翻訳の関連の実例については「翻訳と本文」（1）～（34）（『形成』273～315号所収. 1993.9/10－1997.3）。他諸文献、資料は順次提示。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 課題発表、討議、レポート（本文 6000 字以上）の総合で評価する（特にテキストとの対話の深度と理解、テキスト諸現象の認識と分析、及び考察と検証力）。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
聖書語学特殊研究 a	佐藤 泉	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>通年での履修が望ましい。	
<授業のテーマ>旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。マソラテキストとタルグムの比較を行う基礎を養う。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行う。		
<到達目標>①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。③マソラテキストとタルグムや七十人訳等の古代訳との比較を行えるようになる。		
<授業の概要>聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（創世記31：47・エレミヤ10：11・エズラ4：8－24・5：1－17など）、アラム語文法を学ぶ。聖書の原典と古代訳との比較に慣れていく。		
<履修条件>ヒブル語履修済みであること。また、七十人訳等の古代訳との比較も行うので、ギリシア語等の文法の基礎を身につけていることが望ましい。		
<授業計画> 第1回：序 アラム語について、言語グループ、時代区分などを話す。 第2回：創世記31：47を読みつつ、アラム語の名詞・形容詞を学ぶ。 第3回：エレミヤ10：11を読みつつ、動詞のPeal形の完了・未完了を学ぶ。 第4回：エズラ4：8－24の講読(1) 不規則変化の名詞について学ぶ。 第5回：エズラ4：8－24の講読(2) 動詞のHapel形の完了を学ぶ。 第6回：エズラ4：8－24の講読(3) 動詞のPeal形の分詞、Hitpeel形の完了・未完了を学ぶ。 第7回：エズラ4：8－24の講読(4) 動詞のPael形の完了・未完了、Hapel形の未完了を学ぶ。 第8回：エズラ4：8－24の講読(5) 動詞のHapel形の分詞を学ぶ。 第9回：エズラ4：8－24の講読(6) 動詞のPael形・Hitpeel形・Hitpaal形の分詞を学ぶ。 第10回：エズラ4：8－24の講読(7) 二根字動詞のPeal形と動詞の不定詞・命令を学ぶ。 第11回：エズラ5：1－17の講読(1) 前置詞と代名詞語尾を学ぶ。 第12回：エズラ5：1－17の講読(2) 二根字動詞のHapel形を学ぶ 第13回：エズラ5：1－17の講読(3) 二根字動詞のHitpeel形を学ぶ。 第14回：エズラ5：1－17の講読(4) Pê Yôd 動詞の変化を学ぶ。 第15回：エズラ5：1－17の講読(5) Pê Nûn 動詞の変化を学ぶ。		
<準備学習等の指示>講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。講読箇所について、マソラテキストのアパラートゥスや七十人訳等の古代訳にも注意を払うこと。		
<テキスト>Biblia Hebraica Stuttgartensia ; Biblia Hebraica Quinta –20– Ezra and Nehemiah ; Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition		
<参考書・参考資料等>左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011 ; William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971 ; Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft , 1960 ; Gustaf Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch, Göttingen : E. Pfeiffer, 1938 ; Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950		
<学生に対する評価（方法・基準）>予習・復習、積極的な授業参加の状況、講読箇所に関する発表、（講読箇所以外の）聖書のアラム語のテキストの中から指定された箇所に関する発表（あるいはレポート提出）、単語等に親しむための小テスト等によって成績をつける。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
聖書語学特殊研究 b	佐藤 泉	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>通年での履修が望ましい。	
<授業のテーマ>旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。マソラテキストとタルグムの比較を行う基礎を養う。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行う。		
<到達目標>①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。③マソラテキストとタルグムや七十人訳等の古代訳との比較を行えるようになる。		
<授業の概要>聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（ダニエル書）、アラム語文法の学びを継続する。さらに、エレミヤ書などのタルグムの講読、聖書の原典と古代訳との比較もする。（箇所は未定。授業中に指示する。）		
<履修条件>ヒブル語履修済みであること。また、七十人訳等の古代訳との比較も行うので、ギリシア語等の文法の基礎を身につけていることが望ましい。		
<授業計画> 第1回：ダニエル書の緒論的知識を確認し、前期の文法の復習をしつつ、ダニエル書の講読に備える。 第2回：ダニエル書の講読(1) Pê' ālep 動詞の Peal 形を学ぶ。 第3回：ダニエル書の講読(2) Pê' ālep 動詞の Hapel 形を学ぶ。 第4回：ダニエル書の講読(3) 動詞の変化で字位転換が起こる場合について学ぶ。 第5回：ダニエル書の講読(4) Lamed' ālep・Lamed Hē 動詞の変化を学ぶ。 第6回：ダニエル書の講読(5) 二重' ayin 動詞の Peal 形を学ぶ。 第7回：ダニエル書の講読(6) 二重' ayin 動詞の Hopal 形を学ぶ。 第8回：ダニエル書の講読(7) 代名詞語尾つきの動詞の変化を学ぶ。 第9回：ダニエル書の講読(8) 喉音を含む動詞について学ぶ。 第10回：ダニエル書の講読(9) 特殊な変化をする動詞について学ぶ。 第11回：エレミヤ書の緒論的知識とバビロニア方式の母音記号を確認し、タルグムの講読に備える。 第12回：タルグムの講読(1) バビロニア方式の母音記号で読むことに慣れる。 第13回：タルグムの講読(2) タルグムのアラム語の動詞の変化を学ぶ。 第14回：タルグムの講読(3) アラム語文法を全体的に思い出しつつ読む。 第15回：タルグムの講読(4) 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。		
<準備学習等の指示>講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。講読箇所について、マソラテキストのアパーラトゥスや七十人訳等の古代訳にも注意を払うこと。		
<テキスト>Biblia Hebraica Stuttgartensia；The Pentateuch according to Targum Onkelos；The Former Prophets according to Targum Jonathan；The Latter Prophets according to Targum Jonathan；Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition		
<参考書・参考資料等>左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011；William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971；Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt：Wissenschaftliche Buchgesellschaft，1960；Gustaf Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch, Göttingen：E. Pfeiffer, 1938；Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950		
<学生に対する評価（方法・基準）>予習・復習、積極的な授業参加の状況、講読箇所に関する発表、（講読箇所以外の）聖書のアラム語のテキストの中から指定された箇所に関する発表（あるいはレポート提出）、単語等に親しむための小テスト等によって成績をつける。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書神学特殊研究 a	焼山 満里子	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 新約聖書神学から特に黙示思想研究を取り上げ、新約神学理解を深める。		
<到達目標> 旧約聖書外典偽典・旧約聖書からイエスまでの終末論の系譜をたどり、終末思想の起源と発展を理解する。		
<授業の概要> 新約聖書釈義、研究書講読を通してイエス、パウロ神学を深く学ぶ。		
<履修条件> 聖書ギリシア語原典を参照しつつ研究する準備があること。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 門脇佳吉『パウロの中心思想』 第3回 テサロニケー1章釈義 第4回 テサロニケー2章釈義 第5回 テサロニケー3章釈義 第6回 テサロニケー4章釈義 第7回 テサロニケー5章釈義 第8回 テサロニケニ1章釈義 第9回 テサロニケニ2章釈義 第10回 テサロニケニ3章釈義 第11回 並木浩一『旧約聖書の水脈』第二部「預言者的精神の展開」1, 2 第12回 並木浩一『旧約聖書の水脈』第二部「預言者的精神の展開」3, 4 第13回 ヒンメルファーブ『黙示文学の世界』 第14回 ミークス『古代都市のキリスト教』第6章 第15回 総括 まとめ		
<準備学習等の指示> 各回の課題著書、釈義を予めすませて出席してください。		
<テキスト> 上記、図書館利用など各自準備してください。		
<参考書・参考資料等> 適宜案内します。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 毎回の授業参加、発表、期末レポート。博士課程後期の学生は毎回A4一頁の内容紹介を提出する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書神学特殊研究 b	焼山 満里子	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 新約思想の中でもパウロ神学、黙示思想研究。		
<到達目標> 旧約聖書外典偽典を含め黙示思想、終末論について旧約聖書からイエスを経てパウロ神学に至るまでを理解する。		
<授業の概要> パウロ書簡の釈義、研究書講読を通してパウロ神学を学ぶ。		
<履修条件> 聖書原典を参照しつつ研究する準備があること。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 『終末論の系譜』第一部 1章 預言者の終末論 第3回 『終末論の系譜』第一部 2章 バビロン捕囚以後の地上的・政治的終末待望 第4回 『終末論の系譜』第一部 3章 「天上の神殿」の表象と神秘主義 第5回 『終末論の系譜』第一部 4章 宇宙史の終末論 第6回 『終末論の系譜』第一部 5章 イエス時代の政治主義的メシア運動 第7回 『終末論の系譜』第二部 6章 「神の国は近づいた」 第8回 『終末論の系譜』第二部 7章 「人の子」イエスの再臨 第9回 『終末論の系譜』第二部 8章 過去の中に到来している未来 第10回 『終末論の系譜』第二部 9章 不法を「抑えている者」 第11回 『終末論の系譜』第二部 10章 万物の和解と平和 第12回 『終末論の系譜』第二部 11章 「人の子」・殺された神の子メシアの再臨 第13回 『終末論の系譜』第二部 12章 世の初めから隠されていること 第14回 『終末論の系譜』第二部 13章 遠ざかる終末 第15回 総括 まとめ		
<準備学習等の指示> 各回の課題著書、釈義を予めすませて出席してください。		
<テキスト> 上記、各自、図書館利用など、準備してください。		
<参考書・参考資料等> 適宜案内します。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 毎回の授業参加、発表、期末レポート。博士後期の学生は毎回 A4 一頁の内容紹介を提出する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典特殊研究 a	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>原則として通年（a, b）で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。	
<授業のテーマ> ヨハネによる福音書 16：07～17:23 までの原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
<到達目標> 学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書釈義の方法を修得する。		
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向（研究史、方法論）を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。		
<履修条件> 新約ギリシャ語原典テキスト読解力を有すること。ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい。		
<授業計画> I. 講義を中心に 第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と釈義の諸問題を学ぶ。 第02回 ギリシャ語新約聖書本文批評の実際。 第03回 テキストの文学批評の実際。 第04回 テキストと歴史批評の実際。 II. 演習（参加者による釈義の発表とディスカッション）を中心に 第05回 ヨハネ18：01～11の原典釈義 第06回 ヨハネ18：12～18の原典釈義 第07回 ヨハネ18：19～24の原典釈義 第08回 ヨハネ18：25～32の原典釈義 第09回 ヨハネ18：33～40の原典釈義 第10回 ヨハネ19：01～09の原典釈義 第11回 ヨハネ19：10～16aの原典釈義 第12回 ヨハネ19：16b～24の原典釈義 第13回 ヨハネ19：25～30の原典釈義 第14回 ヨハネ19：31～37の原典釈義 III. 総括 第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。		
<準備学習等の指示> クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、釈義の問題点を明確にしてクラスに出席すること。		
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i>		
<参考書・参考資料等> R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年 R・A・カルペッパー著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年 R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年 C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol.1</i> , 2003.		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000～10,000 文字]）。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典特殊研究 b	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>原則として通年（a, b）で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。	
<授業のテーマ> ヨハネの黙示録 02：08～05:10 までの原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
<到達目標> 学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書釈義の方法を修得する。		
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向（研究史、方法論）を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。		
<履修条件> 新約ギリシア語原典テキスト読解力を有すること。ギリシア語中級文法の知識があることが望ましい。		
<授業計画> I. 講義を中心に 第01回 イントロダクション。黙示録の文学ジャンル。 第02回 黙示録を読む前に（その1）：黙示録の周辺、背景理解。 第03回 黙示録を読む前に（その2）：構造と構成、神学、他。 第04回 黙示録1章～2章7節までを概観し、釈義の営みにおける課題と観点を確認する。 II. 演習（参加者による発表とディスカッション）を中心に 第05回 黙示録06：01～06の原典釈義 第06回 黙示録06：07～11の原典釈義 第07回 黙示録06：12～17の原典釈義 第08回 黙示録07：01～08の原典釈義 第09回 黙示録07：09～12の原典釈義 第10回 黙示録07：13～17の原典釈義 第11回 黙示録08：01～05の原典釈義 第12回 黙示録08：06～13の原典釈義 第13回 黙示録09：01～06の原典釈義 第14回 黙示録09：07～12の原典釈義 III. 総括 第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。		
<準備学習等の指示> クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、釈義の問題点を明確にしてクラスに出席すること。		
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i>		
<参考書・参考資料等> 佐竹明著『ヨハネの黙示録』（上・下巻）2009年 R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年 R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i> , 1993. G. Beale, <i>The Book of Revelation</i> (NIGTC), 1999. D. Aune, <i>Revelation 6-16</i> (WBC), 1997. S. Smalley, <i>The Revelation of John</i> (IVP), 2005. 他、クラスで随時紹介。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000～10,000 文字]）。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。		

聖書神学専攻		
博士論文指導演習聖書神学 a	各指導教授	＜担当形態＞
前期・0単位	＜登録条件＞博士論文指導演習聖書神学 b と通年で登録すること。	
＜授業のテーマ＞ 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。		
＜到達目標＞ 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞		
＜テキスト＞		
＜参考書・参考資料等＞		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞		

聖書神学専攻		
博士論文指導演習聖書神学 b	各指導教授	＜担当形態＞
後期・0単位	＜登録条件＞博士論文指導演習聖書神学 a と通年で登録すること。	
＜授業のテーマ＞ 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。		
＜到達目標＞ 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞		
＜テキスト＞		
＜参考書・参考資料等＞		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞		

組織神学専攻・組織神学関係		
教義学特殊研究 a	須田 拓	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 教会論の諸相を学ぶことを通して、深い教義学の理解を持つことを目指す。		
<到達目標> 教会について、現代神学にどのような議論があるのかを知り、自分の研究テーマと関連させつつ、自らこの問題について深く考えることができるようになる。		
<授業の概要> 教会論（但し聖礼典についての理解を除く）について講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めて行く。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべき教会論の姿を模索する。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 教会論の論点(1) 教会の本質 第3回 教会論の論点(2) 見える教会の形成 第4回 教会の本質と救済における位置(1) カール・バルトの場合 第5回 教会の本質と救済における位置(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第6回 教会の本質と救済における位置(3) ユルゲン・モルトマン、ロバート・ジェンソンの場合 第7回 履修者による発表 第8回 見える教会とその形成(1) カール・バルトの場合 第9回 見える教会とその形成(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第10回 見える教会とその形成(3) ユルゲン・モルトマン、ロバート・ジェンソンの場合 第11回 見える教会とその形成(4) コリン・ガントンの場合 第12回 三位一体と教会(1) コリン・ガントンの場合 第13回 三位一体と教会(2) ミロスラフ・ヴォルフの場合 第14回 教会論についてのその他の事項について 第15回 履修者による発表とまとめ		
<準備学習等の指示> 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく。		
<テキスト> 特になし		
<参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と意見表明、期末のレポート（6,000字程度）によって評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
教義学特殊研究 b	須田 拓	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 人間の自由について、神学史上の論点とその教義学的理解を概説する。		
<到達目標> 人間の自由について、神学史上の議論を知り、自らの研究テーマと関連させつつ、自ら神学的に考えることができるようになる。		
<授業の概要> 自由意志とキリスト者の自由について、神学史上の議論及び現代の議論を、組織神学の観点から、講義と、博士後期課程の履修者による発表及び意見表明を交えて進めて行く。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 論点の整理 第3回 自由意志論(1) アウグスティヌスの場合とペラギウス論争 第4回 自由意志論(2) エラスムスとルターの場合 第5回 自由意志論(3) カルヴァンの場合 第6回 自由意志論(4) アルミニウス主義者の場合 第7回 自由意志論(5) ピューリタンとジョナサン・エドワーズの場合 第8回 自由意志論(6) 現代の神学者の場合 第9回 中間総括 第10回 キリスト者の自由(1) ルターとカルヴァンの場合 第11回 キリスト者の自由(2) ピューリタンの場合 第12回 キリスト者の自由(3) カール・バルトの場合 第13回 キリスト者の自由(4) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第14回 キリスト者の自由(5) ユルゲン・モルトマンの場合 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく。		
<テキスト> 特になし		
<参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と意見表明、期末のレポート（6,000字程度）によって評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
組織神学特殊研究 a 現代哲学特殊研究 a	神代 真砂実	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 特になし。	
<授業のテーマ>組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』中の和解論から贖罪論にあたる部分を学ぶことで、バルトの神学思想について深い理解を得、自分なりの評価を下せるようにする。		
<到達目標> ①バルトの神学的思惟の特徴を理解する。②バルトを通して、贖罪論についての総合的な理解を身に着ける。③当該主題についてのバルト神学の貢献と問題点を理解し、自分なりの評価をレポートのかたちで説得力をもって表明できるようにする。		
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から和解論の 59 節「神の子の従順」に展開される議論を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。		
<履修条件> 前期課程との合同（並行）授業のため、後期課程の履修者は前期課程の学生よりも常に少なくとも一歩から二歩先んじた準備が期待されている。また、議論をリードする役割も求められる。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 テキスト、3～28 頁（59 節 1. 異郷に赴く神の子の道①） 第3回 同、28～51 頁（同②） 第4回 同、52～74 頁（同③） 第5回 同、74～98 頁（同④） 第6回 同、99～131 頁（2. われわれに代って審かれ給うた者としての審判者①） 第7回 同、131～162 頁（同②） 第8回 同、162～189 頁（同③） 第9回 同、189～214 頁（同④） 第10回 同、214～233 頁（同⑤） 第11回 同、234～254 頁（3. 父の判決①） 第12回 同、254～284 頁（同②） 第13回 同、284～309 頁（同③） 第14回 同、309～340 頁（同④） 第15回 同、340～367 頁（同⑤）		
<準備学習等の指示> 演習なので、必ずテキストをよく読んでから出席することはもちろんであるが、さらに、テキストの内容に関連する事柄について自分から積極的にリサーチし、考察し、問題点を整理しておくこと。		
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・和解論 I / 2 僕としての主イエス・キリスト 上』、井上良雄訳（新教出版社、オンデマンド）。		
<参考書・参考資料等> 授業の中で適宜、紹介するが、Geoffrey W. Bromiley, <i>An Introduction to the Theology of Karl Barth</i> 中の当該箇所についての記述には必ず目を通しておくこと。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度（議論におけるリーダーシップを含む）、小課題、および期末のレポート（本文 6,000 字以上）による。		

組織神学専攻・組織神学関係		
現代神学特殊研究 a	芳賀 力	＜担当形態＞ 単独
前期・2単位	＜登録条件＞ 通年(a, b)での登録が望ましい。	
＜授業のテーマ＞ 永遠の命と神の国をめぐるキリスト教的希望について研究する。		
＜到達目標＞ 現在的終末論の立場と見られる P. ティリッヒと未来的終末論を主張する J. モルトマンの神学を正確に理解し、それぞれの特色と問題点を明確にした上で、自分の博士論文テーマと絡めて対論する。		
＜授業の概要＞ 前期は主としてティリッヒの『組織神学』の第5部「歴史と神の国」のテーマを扱う。分担を決め、順番に担当箇所の要約とコメントをしてもらう。終わったらモルトマンの『神の到来』の最初の部分に入る。		
＜履修条件＞ 聖書神学専攻者であっても構わない。		
＜授業計画＞ 第1回 オリエンテーション(1)： <u>ティリッヒ神学の特徴</u> について述べる。 第2回 I A 1 「人間と歴史」を読む。 第3回 I A 2 「一歴史と存在の範疇」を読む。 第4回 I A 3 「歴史の動態」を読む。 第5回 B 「歴史的次元における生の曖昧さ」を読む。 第6回 C 「歴史解釈と神の国の探求」を読む。 第7回 II A 「歴史の動態と新しき存在」を読む。 第8回 B 「神の国と教会」を読む。 第9回 C 「神の国と世界史」を読む。 第10回 III A 「歴史の目標または永遠の生命」を読む。 第11回 B 「個々の人格とその永遠の運命」& C 「神の国—時間と永遠」を読む。 第12回 オリエンテーション(2)： <u>モルトマン神学の特徴</u> について述べる。 第13回 I 1 「現代における終末論の時間化」& 2 「終末論の永遠化」を読む。 第14回 3 「来たりたもう神の終末論」& 4 「ユダヤ教におけるメシア思想の再生」を読む。 第15回 総括		
＜準備学習等の指示＞ 内容の濃いディスカッションにするため、分担に当たっていなくても、次の回のテキストを前もって読んでおくこと。		
＜テキスト＞ P. ティリッヒ『組織神学 第三巻』土居真俊訳、新教出版社、1984 年、373－533 頁。J. モルトマン『神の到来—キリスト教的終末論』蓮見和男訳、新教出版社、1996 年。受講生には部分コピーを作成する。		
＜参考書・参考資料等＞ 藤倉恒雄『ティリッヒの「組織神学」研究』新教出版社、1988 年。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 他の学生の理解を助けるように授業をリードすると共に、学期末に自分の博士論文テーマを絡ませた小論文ないし独自の意見をまとめたレポートを用意する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
現代神学特殊研究 b	芳賀 力	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 通年(a, b)での登録が望ましい。	
<授業のテーマ> 前期に引き続いて、永遠の命と神の国をめぐるキリスト教的希望について研究する。		
<到達目標> 未来的終末論を主張する J. モルトマンの神学を正確に理解し、その特色と問題点を明確にする。		
<授業の概要> 後期はモルトマンの『神の到来』を順番に読み、内容を検討し、批判的な対論を試みる。分担を決め、順番に担当箇所の要約とコメントをしてもらう。		
<履修条件> 聖書神学専攻者であっても構わない。		
<授業計画>		
第1回	II1「愛された生と死」& 2「魂の不滅か肉体のよみがえりか」を読む。	
第2回	3「死は罪の結果か、生の自然の終わりか」を読む。	
第3回	4「死者はどこにいるのか」を読む。	
第4回	5「死・悲嘆・慰め」を読む。	
第5回	III1「歴史の黙示録」を読む。	
第6回	2「メシア的終末論—千年王国」& 3「政治的千年王国説—神聖王国」を読む。IV	
第7回	4「政治的千年王国説—救済者・国民」& 5「教会的千年王国説—諸国民の母・教師」を読む。	
第8回	6「画期的千年王国説」& 7「千年王国的終末論は必要か」を読む。	
第9回	8「人間の歴史の終わる時—一時の終局主義」& 9「歴史の終り—現代の歴史の終わりの預言者たち」を読む。	
第10回	10「黙示的終末論は必要か」& 11「万物の復興」を読む。	
第11回	IV1「創造の将来安息日とシェキーナ」& 2「世界の絶滅か完成か」を読む。	
第12回	3「神の永遠性における時間の終り」を読む。	
第13回	4「神の現臨における空間の終り」& 5「宇宙的神殿—天のエルサレム」の(1),(2),(3)を読む。	
第14回	5「宇宙的神殿—天のエルサレム」の(4),(5)& V「栄光—神的終末論」を読む。	
第15回	総括	
<準備学習等の指示> 内容の濃いディスカッションにするため、分担に当たっていなくても、次の回のテキストを前もって読んでおくこと。		
<テキスト> J. モルトマン『神の到来—キリスト教的終末論』蓮見和男訳、新教出版社、1996年。受講生には部分コピーを作成する。		
<参考書・参考資料s等> J. モルトマン『希望の神学』高尾利数訳、新教出版社、1968年。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 他の学生の理解を助けるように授業をリードすると共に、学期末に自分の博士論文テーマを絡ませた小論文ないし独自の意見をまとめたレポートを用意する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
神学史特殊研究 a	棚村 重行	＜担当形態＞ 単独
前期・2単位	＜登録条件＞ 通年で履修することが望ましい。	
＜授業のテーマ＞ 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」。前期では、17～19 世紀半ばまでの英米日の福音主義神学思想の第一次史料を読み、履修生各自が自らの第二次史料（論文）を作成する過程も学ぶ。		
＜到達目標＞ 履修者が、英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17 世紀～20 世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学にかんする第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深めることを目指す。以上の目標を、後期課程の受講者の博士論文のテーマと関連づけて理解し、展開してゆく応用力の発揮を、レポートで立証する。		
＜授業の概要＞ 前期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を提起し、17～19 世紀前半（1650-1860）までの英米のピューリタニズム移植、第一次、第二次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について、講義と史料分析を行う。		
＜履修条件＞ 前期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を提起し、17～19 世紀前半（1650-1860）までの英米のピューリタニズム移植、第一次、第二次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について、講義と史料分析を行う。		
＜授業計画＞ 第 1 回：コース紹介。導入講義：日本の「福音主義」「福音主義の歴史」研究の批評(佐藤敏、古屋、青木他) 第 2 回：講義（一）：アメリカ教会史と神学思想史論の吟味：F.ボンヘッファー、W.G.マックラクリン他。 第 3 回：史料分析（一）：17～18 世紀「ピューリタン大覚醒」（T. フッカー）と英国メソジズム（ウェスレー）。 第 4 回：講義（二）：18 世紀北米における「第一次大覚醒運動」（1730～1760）植民地時代の三大教派の出現。 第 5 回：史料分析（二）：J. エドワーズ（1）：「[ニューイングランド信仰復興の忠実な報告] 他。 第 6 回：史料分析（三）：J. エドワーズ（2）：「信仰復興についての幾つかの考察」 他。 第 7 回：講義（三）：18 世紀北米のメソジズム神学、信仰復興、教会形成：「宗教箇条」、A. クラーク等。 第 8 回：講義（四）：19 世紀前半の「第二次大覚醒運動」（1800～1830）開拓時代の三大教派成長。 第 9 回：史料分析（四）：19 世紀前半の新派カルヴァン主義神学の誕生：N.W.テイラー、L.ビーチャー等。 第 10 回：史料分析（五）：C.G.フィニー（1）：回心についての説教、「組織神学」から。 第 11 回：史料分析（六）：C.G.フィニー（2）：「宗教の復興とは何か？」 第 12 回：史料分析（七）：長老派内の新派カルヴァン主義：A. バーンズ 「救いの道」 第 13 回：史料分析（五）：メソジストの神学、信仰復興、教会形成：P.カートライト、D.D. ウィードン。 第 14 回：講義（五）：幕末開国期日本：改革派-長老派-会衆派型およびメソジスト型「二つの福音」問題 第 15 回：講義（六）：若き植村正久、本多庸一：福音主義神学、信仰復興、教会形成。		
＜準備学習等の指示＞ テキストの予習と復習が大切である。とくに予習に力を入れ、授業中の議論を準備すること。二次史料の予習を通して、授業中の議論を準備すること。更に授業に参加し、自らの研究のテーマを見出し、研究論文を作成する技術を見出すこと。		
＜テキスト＞ ①W. G. McLoughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i> , Harper and Low, 1968(コピー本で配布) ②D.A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005.（部分的にコピー資料として配布）		
＜参考書・参考資料等＞ 授業中に追って紹介する。特に、S.E. Ahlstrom, <i>Theology in America</i> の必要資料はコピーして配布する。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 前期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成し、提出する。分量は 400 字詰め原稿用紙に換算して 25-30 枚以内。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
神学史特殊研究 b	棚村 重行	＜担当形態＞ 単独
後期・2 単位	＜登録条件＞ 通年で履修することが望ましい	
＜授業のテーマ＞ 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」。後期では、19 世紀半ばから 20 世紀末までの英米日福音主義の神学思想の第一次史料を読み、履修生各自が自らの第二次史料（論文）を作成する過程も学ぶ。		
＜到達目標＞ 英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17 世紀～20 世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学の第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深める以上の目標を、後期課程の受講者の博士論文のテーマと関連づけて理解し、展開してゆく応用力の発揮を、レポートで立証する。		
＜授業の概要＞ 後期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を確立し、19 世紀後半～20 世紀後半（1865-2010）までの米日の第三次、第四次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について講義と史料分析を行う。		
＜履修条件＞ 前期に同じ。		
＜授業計画＞ 第 1 回：コースの紹介。講義（一）「マックラクリンの北米大覚醒運動史」のおさらい 第 2 回： 講義（二）：19 世紀後半の北米神学の諸相：南北戦争以後の北米の社会と宗教の変貌 （T.L.スミス） 第 3 回：史料分析（一）：19 世紀後半の「第三次大覚醒運動」（1870～1920）「都市の信仰復興」について 第 4 回：史料分析（二）：D.L.ムーディー（1）：ムーディーの諸説教にみる福音主義神学と教会 第 5 回：史料分析（三）：D.L.ムーディー（2）：彼の信仰復興論「教会に行かぬ人に福音をどう届けるか？」 第 6 回：講義（三）：20 世紀初頭の日本の「大挙伝道」および「神の国」運動：本多庸一、植村正久、賀川豊彦 第 7 回：史料分析（四）：20 世紀前半の第一次世界大戦後の北米の「近代主義」対「根本主義」論争、新正統主義主義神学について（H.R.ニーバーと熊野義孝） 第 8 回：講義（四）：A.J.シンプソン：『四重の福音』；A.J.ゴードン『み霊の務め』 第 9 回：史料分析（五）：日本における神学の変貌：中田重治のホーリネス神学と逢坂元吉郎 の高教会神学 第 10 回：講義（五）：20 世紀後半の「第四次大覚醒〔戦後信仰復興〕運動」（1950～1990?） 第 11 回：史料分析（六）：ビリー・グラハム（1）：略歴と神学諸テーマ（啓示、創造と墮罪、贖罪） 第 12 回：史料分析（七）：ビリー・グラハム（2）：諸テーマ（救済、教会、説教と聖礼典、終末論） 第 13 回：講義（六）：第二次世界大戦後日本における「戦後信仰復興運動」の神学、信仰復興、教会形成。 第 14 回：講義（七）：1980 年代後の英米日の福音主義諸派の動向：北米の「宗教的右派」、「福音派」の動向。 第 15 回：総合討論：通年の学びからみた「福音主義」とその歴史の総括。		
＜準備学習等の指示＞ 前期に同じ。		
＜テキスト＞ ①W. G. McLoughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i> , Harper and Low, 1968(コピー本で配布) ② D. A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005.（部分的にコピー資料として配布）		
＜参考書・参考資料等＞ 授業の中で、教員が追って指示する。Ahlstrom, <i>Theology in America</i> の資料コピーを配布する。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 後期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成せよ。分量は 400 字詰め原稿用紙に換算して 25－30 枚以内。		

組織神学専攻・実践神学関係		
キリスト教教育特殊研究 a	朴 憲郁	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> ヨーロッパにおける宗教教育		
<到達目標> 今やキリスト教的伝統の自明性が崩れゆくヨーロッパ世界では、キリスト教の世俗化と他宗教信仰の移民の流入などで、宗教が流動化し多元化する社会を現出させている。しかし、将来の共同社会の形成に不可欠な人間の尊厳、自由、民主主義、平和>を子供たちの間で培う際に重要な役割を担う宗教教育が、正教分離原則の諸国でどのように実施されているのかを把握したい。		
<授業の概要> 最初に、近年の欧米諸国の宗教事情を全体的に把握する。その上で、いわゆる先進諸国における宗教教育がどのようになされているか、また何を旨とするのかを、諸資料を用いた共同作業（発表を含む）によって把握していく。		
<履修条件> 特にないが、授業の後半で文献を読み合わせ、必要に応じて発表していただく。		
<授業計画> 第1回 ヨーロッパの宗教教育を巡って（序論） 第2回 欧米諸国の宗教事情－カナダ－ 第3回 欧米諸国の宗教事情－ロシア－ 第4回 欧米諸国の宗教事情－スペイン－ 第5回 欧米諸国の宗教事情－スウェーデン－ 第6回 欧米諸国の宗教事情－イギリス－ 第7回 欧米諸国の宗教事情－ドイツ－ 第8回 欧米諸国の宗教事情－フランス－ 第9回 欧米諸国の宗教事情－イタリア－ 第10回 欧米諸国の宗教事情－アメリカ－ 第11回 ヨーロッパにおける宗教と教育－スイス－ 第12回 ヨーロッパにおける宗教と教育－イギリス－ 第13回 ヨーロッパにおける宗教と教育－ドイツ－ 第14回 ヨーロッパにおける宗教と教育－オランダ－ 第15回 ヨーロッパにおける宗教と教育－フィンランド－ 宗教教育学の総括 定期試験		
<準備学習等の指示> 次週の授業範囲の関連資料を、各自前もって読んでおくこと。随時、担当箇所を発表していただく。		
<テキスト> 1. 文化庁、『海外の宗教事情に関する調査報告書』、平成20年版／平成24年版、 2. Peter Schreiner (ed.), “Religious Education in Europe”, Comenius Institute, Münster 2000. 上の二つのテキストは担当教師が用意する。		
<参考書> 1. 善家幸敏、『国家と宗教』－政教関係を中心として－、成文堂、平成5年(1993年) 2. Peter Schreiner, “Religious Education in the European Context”, Hungarian Educational Research Journal; One Blog by Peter Schreiner, Religion and Education in Europa, 2013~2014.		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業時の発表、討論への参加度によって評価する。 2/3以上の授業出席者を評価の対象とする。		

組織神学専攻・実践神学関係		
キリスト教教育特殊研究 b	朴 憲郁	＜担当形態＞ 単独
後期・2単位	＜登録条件＞ 特になし	
＜授業のテーマ＞ アメリカ宗教教育史		
＜到達目標＞ 近現代アメリカ市民社会と教会を支えた代表的なキリスト教教育思想の流れを把握する。		
＜授業の概要＞ 初めに16～17世紀前半のニューイングランド・ピューリタニズムにおける高等教育を取り上げた後、17世紀後半から20世紀前半までのプロテスタント諸教派を背景とする道徳・宗教・教育、及びその代表的な担い手となった指導者たちの思想を追っていく。その際に会衆派とメソジスト派の系譜を辿ってみる。最後に、日本のキリスト教大学の使命と課題を取り上げる。		
＜履修条件＞ 履修者は授業時に1～2度発表の機会を得るが、発表しない学生も当該箇所を事前に読んで準備し、討論に加わっていただく。		
＜授業計画＞ 1. ニューイングランド・ピューリタニズムにおける高等教育 2. 会衆派教会の経験と慈愛、道徳共同体の構築 3. B.フランクリンの非宗派的な道徳的人間形成ーピューリタニズムと理神論の背景ー 4. アメリカ中西部のキリスト教教育ーコモン・スクーラー 5. 長老派信仰のキリスト教教育観ーマクガフィーの場合ー 6. マサチューセッツの宗教教育・道徳教育ー会衆派とユニテリアニズムー 7. マサチューセッツの宗教教育政策 8. コークスベリー・カレッジの教育 9. メソジスト派カレッジと教育方針 10. プロテスタント大学の高等教育 11. 非宗派的キリスト教大学 12. 日本のキリスト教大学の草創期ーその1ー 13. 日本のキリスト教大学の草創期ーその2ー 14. キリスト教大学の教育論ー環境教育の視点ー 15. キリスト教大学の教育論ー変わりゆく大学の中でー 定期試験		
＜準備学習等の指示＞ セミナー形式で、発表学生以外の受講者も、指定箇所を予め読んで授業に臨むこと		
＜テキスト＞ ・東京基督教大学共立基督教研究所編、『大学とキリスト教教育』、ヨルダン社、1997年（当該箇所プリント用意） ・大森秀子、『多元的宗教教育の成立過程』、東信堂、2009年（各自購入）		
＜参考書＞ ・四国学院大学キリスト教教育研究所[編]、『大学とキリスト教教育』、新教出版社、2005年 ・P.G.アルトバック・馬越編、『アジアの高等教育改革』、玉川大学出版部、2006年 ・青山学院大学総合研究所キリスト教文庫研究所[編]、『キリスト教大学の使命と課題』、教文館、2011年		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 2/3以上の出席を評価の前提とする。発表と討論での発言などの参加度、レポート（5000～6000字、その際参考文献2冊以上列挙、利用のこと）提出などで評価する。		

組織神学専攻		
博士論文指導演習組織神学 a	各指導教授	＜担当形態＞
前期・0単位	＜登録条件＞博士論文指導演習組織神学 b と通年で登録すること。	
＜授業のテーマ＞ 学生各自の研究課題に従い、博士論文のテーマを設定し、研究を深め、論文を執筆する。		
＜到達目標＞ 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、実際に博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する組織神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞ 小まめに指導教授と面談し、アドヴァイスを受けるようにする。		
＜テキスト＞		
＜参考書・参考資料等＞		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞		

組織神学専攻		
博士論文指導演習組織神学 b	各指導教授	＜担当形態＞
後期・0単位	＜登録条件＞博士論文指導演習組織神学 a と通年で登録すること。	
＜授業のテーマ＞ 設定したテーマのもとで、さらに研究を深め、論文を執筆する。		
＜到達目標＞ 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞ 小まめに指導教授と面談し、アドヴァイスを受けるようにする。		
＜テキスト＞		
＜参考書・参考資料等＞		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞		